

鈴木 康由（鹿児島教区 助祭）

今日の福音では道端に座り、物乞いをしていた一人の盲人がイエス様に「憐れんでください」と叫び続ける場面がありました。この盲人の言葉は単に「私に同情してください」という意味ではありません。「(私を) 憐れみ、助けてください」、また「(私に) 慈善の業をなしてください」という、切なる願望が含まれています。この願いに対してイエス様は「何をして欲しいのか」とお尋ねになります。ここで不思議に思った方はおられませんか。なぜなら、彼はイエス様ご自身に近づいてきたのですから、イエス様は彼が盲人であることにすぐに気付いたはずだからです。だとすれば、彼が何を望んでいるのは聞くまでもなかったことでしょう。しかし、イエス様は面と向かってこの盲人に「何をして欲しいのか」と、分かりきった質問をしたのです。このちょっと不思議に思える箇所を通じて、福音記者マルコは、今現在、福音書を読んでいる私たちに大きな問いかけをしているように思えます。

さて、マルコ福音書の冒頭を思い出してみてください。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(1・15) というイエス様の言葉があります。さらりと読み飛ばしてしまいがちなこの言葉なのですが、実はここにこそイエス様の福音の中核があり、また、私たちの信仰の拠り所の一つがあるのです。それはどういうことなのでしょう。今、私たちが生きているこの世界は、実感はないでしょうが、イエス様の御降誕によって既に神の国の完成に向けて歩みを始めているのです。例えて言うのなら、イエス様がこの世に遣わされる前は神と人間との関係は平行線であり、決して交わることはありませんでした。なぜなら、人間は原罪によって神の永遠から離れ、有限な存在となってしまったからです。しかし、イエス様が神様からこの世に遣わされたことにより、今まで平行線だった神と人間との関係は変わったのです。そう、イエス様を通じて人間の歴史は神様に向けて歩みを変えたのです。イエス様が語る神の国とは死後の世界や抽象的な概念ではありません。イエス様はこの世界に生まれ福音を告げ、この地上で死んで復活し、そして再びこの地に来られるのですから、神の国とはまさにこの地上で実現するものなのです。もちろん、今のこの世界は神の国とは程遠いものです。しかし、神の国がこの世に実現することは神様のお望みでもあります。だからこそ、神様はイエス様をお遣わしになったのです。ではなぜ、イエス様の御降誕以来、約 2000 年も経つというのに、今のこの世で神の国は実現していないのでしょうか。実は、ここにこそ福音書が教えてくれる神の国の特徴があります。皆さんがご存知のように神様は私たちに先立ち、私たちを愛してくださっていま

す。であるのならば、神様がこの世界に神の国を実現させてくださればいいのに…とお考えになる方もおられるかもしれません。人間的に考えればもっともな意見です。しかし、神の国が実現するためには、神の愛に対する私たち人間の応答が求められるのです。つまり、私たちに先立つ神の愛に応える行いが必要なのです。このように人間に注がれる神の愛とその愛に応える人間の行為があって初めて神の国が実現するのです。言い換えれば、神様の人間に対する愛と人間の神様に対する愛とが交わるとき、そこにこそ神の国が実現するのです。もし、この地上の隅々にまでイエス様が教えてくださった最も大切な掟が浸透し、地上のすべての人がその掟を実践するようになるとき、そのときにこそこの地上は神の国となるのです。では、その掟とは何か…それは神への愛と隣人愛の実践です（マルコ 12・28-34）。神への愛と隣人愛の実践がこの世界に限なく満ちるときにこそ、神の国がこの世で実現するのです。そのときにはこの地上に病や貧困、そして戦争や差別による苦しみ、さらには人間にとって究極的な悲しみである死すら消え失せてしまうのです。このように考えると福音書の至るところに描かれている奇跡とは、神の国が実現したときの有様をイエス様が私たちに見せてくれる“しるし”であると言えます。まさに、この神の国という視点を欠いて、福音書の奇跡物語を読むのであれば、奇跡の真実性を問うてみたり、こじつけのように奇跡の意味を考えてみたりしてしまうこと陥ってしまうでしょう。いずれもこうした議論は的外れなものなのです。

さて、今までお話ししてきたことに基づいて今日の福音を振り返ってみましょう。今日、朗読された箇所を中心は、単に盲人の目が見えるようになった、ということにあるわけではありません。神の国が実現した暁には、“眼が見えない”といった不自由さを持つ者は誰もいない、ということイエス様は証明をなさったのです。では、なぜこの盲人はあたかも神の国に入ったかのように癒されたのでしょうか。また、なぜ、冒頭でお話しした通りイエス様は分かりきったことを敢えて尋ねたのでしょうか？ その理由はイエス様の「あなたの信仰があなたを救った」という言葉にあります。ここでの「信仰」とは“信じる気持ち”ではありません。福音の中心である神の国がイエス様と共に既に来ている、ということに対する信仰なのです。この盲人は多くの人々の制止を振り切り、イエス様に聞こえるよう「わたしを憐れんでください」と叫び続けたのですから、イエス様が奇跡をなしうる方であることを既に知っていたでしょう。しかし、それだけではありません。彼はイエス様が神の国が到来したことを証する神の子であり、イエス様こそ預言者たちが語っていた本当の救い主・メシアであるという信仰があったのです。また、イエス様の御言葉や神の国の到来にかける自分の望みをイエス様の前で行いと言葉によって表明したからこそ、イエス様の「あなたの信仰があなたを救った」という言葉と共に癒されたのです。今を生きる私たちは、果たしてこの盲人のように万難を排してでもイエス様に近づこうという思いはあるのでしょうか。すべてを差し置いてまずイエス様に切なる願いを祈りとして訴えるこ

とをしているのでしょうか。ちょっと思い出してください。マルコ福音書にはイエス様が故郷のナザレにお帰りになったとき「そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった」という記述があります（マルコ 6・5）。ここからもイエス様とイエス様の福音に対する信仰がなければ奇跡は行い得ないことが窺えます。

信仰年を迎えた今、イエス様の到来によってまさに「時は満ち、神の国は近づいた」のだ、ということをもう一度、考えてみましょう（マルコ 1・15）。イエス様の到来と共に神の国が近づいているからこそ、イエス様は「悔い改めて福音を信じなさい」（同左）とお命じになったのです。私たちが悔い改め、福音を信じるのなら、それにより自ずと神への愛が今まで以上に心に燃え立ち、その愛は隣人愛の実践へと私たちを駆り立てることでしょう。神様は「私」だけではなく、同じように「私の隣人」をも愛しているのです。そして、この神への愛と隣人愛の実践により、キリストを信じる私たちにより、そして教会に属する私たちにより、神の国はさらにこの世に近づくのです。ここに私たちの信仰があります。実に私たち一人ひとりには神の国を実現させるための使命をイエス様から委ねられているのです。大切なことを繰り返します。洗礼を受け、イエス様と結ばれた私たちは教会共同体に属する者として神の国がこの世界で実現するために、それぞれの場でイエス様の福音を生き、それを証していく使命を委ねられているのです。信仰年を迎えた今、このことを心に留めて日々を生きるのなら、イエス様と私たちの関係はますます深まっていくことでしょう。